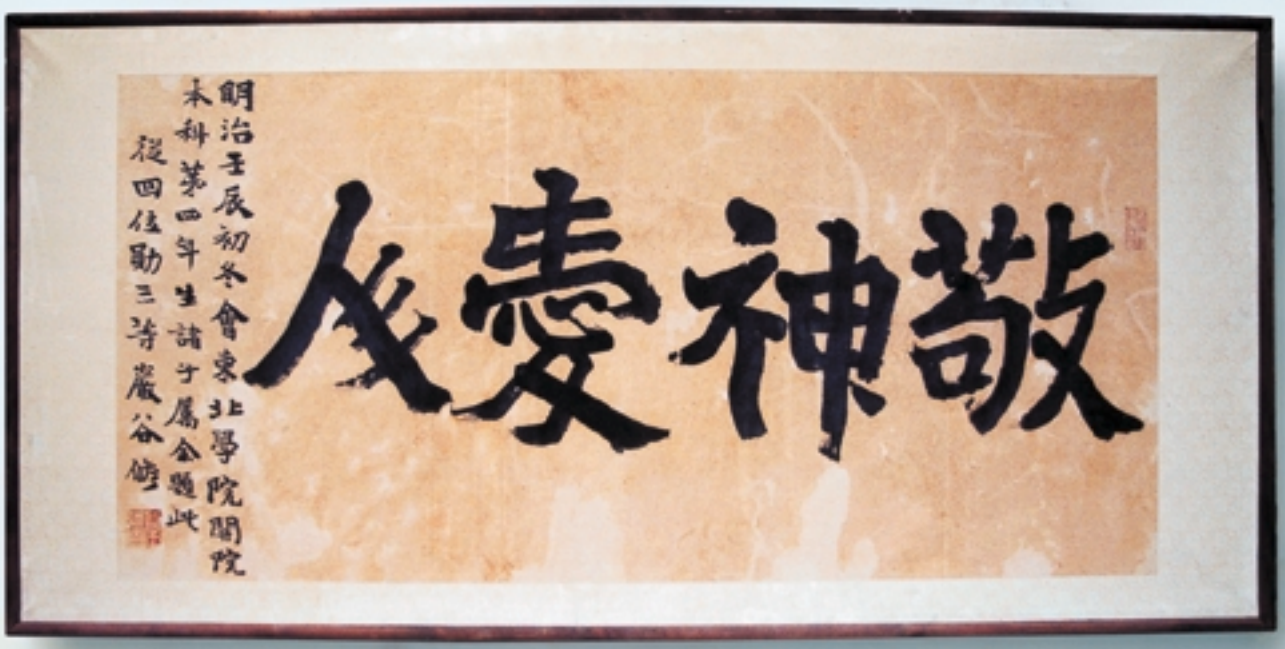
TOHOKU GAKUIN ARCHIVES

東北学院資料室

LIFE
LIGHT
LOVE

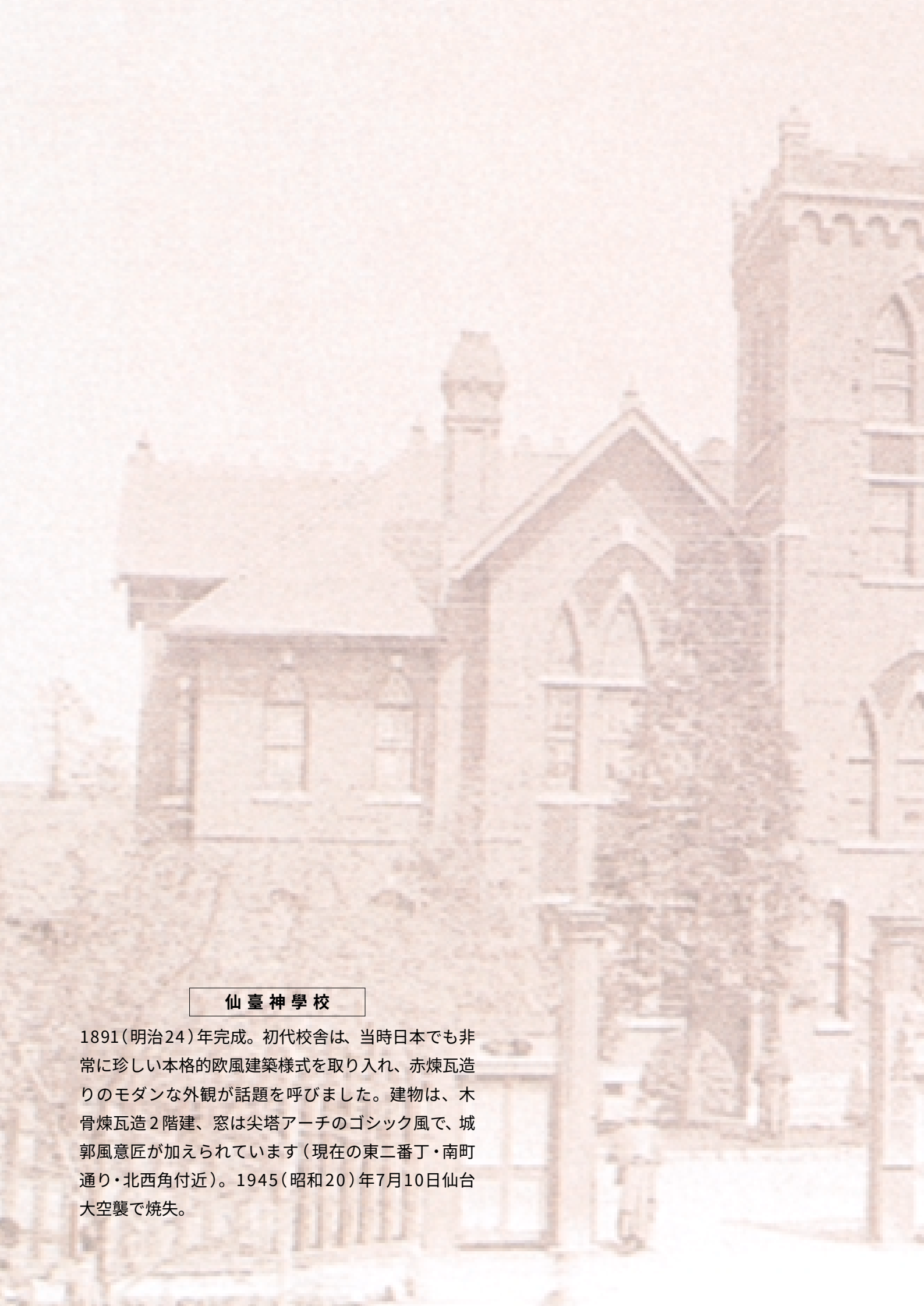
創刊号
2001.12.31



敬神愛人

1892（明治25）年11月に行われた東北学院開院式（その以前は仙台神学校）の際、本科4年生が記念に神学校の講堂に掲げたもの。巖谷修氏の揮毫による。

学校法人 東北学院



仙臺神學校

1891（明治24）年完成。初代校舎は、当時日本でも非常に珍しい本格的欧風建築様式を取り入れ、赤煉瓦造りのモダンな外観が話題を呼びました。建物は、木骨煉瓦造２階建、窓は尖塔アーチのゴシック風で、城郭風意匠が加えられています（現在の東二番丁・南町通り・北西角付近）。1945（昭和20）年7月10日仙台大空襲で焼失。

CONTENTS

「東北学院資料室」創刊号発行にあたって
東北学院長 田口 誠一 …… 2

「東北学院資料室創刊号」に寄せて
押川 昌一 …… 3

シュネーダー先生の面影 松山 国夫 …… 4

シュネーダー記念館資料室設置までの歩み
竹井 一夫 …… 6

青根セミナーハウスの思い出 石川 大 …… 8

東北学院資料室開設にあたって
出村 彰 …… 10

回想・土樋キャンパス物語 志子田 光雄 …… 12

ホームカミングデー『同窓祭』 …… 18
―懐かしい出会いがそこにある―

東北学院の沿革 …… 22

東北学院資料室運営委員会規程 …… 28

資料室日誌・利用状況 …… 29

ごあいさつ

「東北学院資料室」創刊号発行にあたって

東北学院長　田　口　誠　一

東北学院資料室は東北学院創立115周年に当たる昨年5月15日に開設の運びとなりました。出村彰資料室準備委員長はじめ委員の方々のご尽力により、学院関係者の長年の念願が叶えられ大きな喜びであります。

当資料室はキリスト教信仰の精華ともいうべき東北学院全体の伝統と歴史を将来に伝承するとともに「東北学院の創立の精神」に関する資料を収集・保存・展示し、東北学院の発展に資することを目的として設置されました。オープンセレモニーは日程の都合上、正式に挙行することができませんでしたが、上記5月15日を以ってその開設日といたします。

東北学院創立百周年記念事業の一環として編纂された『東北学院百年史』のために、内外の皆様より、ご提供頂きました貴重な写真や資料等が散逸しないよう整理し、保存した上で適宜公開してまいります。

開設当初は、東北学院の三校祖であります　押川方義、W.E.ホーイ、D.B.シュネーダーの三先生に関する資料や写真を中心に展示し、以降逐次その趣向を変えつつ、常設公開することにいたしました。

10月13日の大学ホームカミングデー（同窓祭）の日には招待者の学生当時の卒業アルバムや資料などを加えて展示しました。

11月3日の「仙台市文化財公開日」には当資料室に加えて、本館、礼拝堂、さらにシップル館等の歴史的建造物も公開し、多くの市民の方々に見学いただきました。

また公開クリスマスや平日にも随時、教職員、在校生、受験生、卒業生や教会関係者が訪れ、その数は1200余名を超えております。

さらに、この度は、資料室運営委員会のもとで『東北学院資料室創刊号』の発行が決まり、この上ない喜びと感謝でございます。

これらの事からも、アーカイヴズを大切にすることが、歴史ある東北学院の生きた証しであり「建学の精神」の再確認につながるのもと思われます。

欧米では大学史は大学や学部の歴史学の一部門として位置付けられております。今後、大学史資料協議会等の研究会のもとに事務担当者の資料収集が本格化し、これらの諸活動ともども毎年、歴史資料誌等の発行ができればと思います。

今後とも皆様の変わらぬ温かいご援助を得て、本資料室のさらなる充実発展を図っていきたいものです。有難うございました。

プロフィール　TAGUCHI, Sei-ichi

1920（大正9）年生まれ
東北学院中学部卒業・旧制第二高等学校・東北大学工学部卒業後
東北学院中学・高等学校校長、常任理事
学院長、理事長、同窓会会長

「東北学院資料室創刊号」に寄せて

押　川　昌　一

「東北学院資料室創刊号」発刊おめでとうございます。

すぐ私は、1936（昭和11）年5月東北学院創立50周年記念式典の日のことを思い出しました。私は父清（祖父方義の次男）に連れられて、東京から仙台の式典に参列すべく出かけて行っていたのです。前後のことはまるで忘れてしまいましたが、その朝私たち親子は院長シュネーダー先生のお宅から自動車でご一緒に式場の学院講堂まで行きました。私たち親子を後の客席に乗せ、ご自身は助手席に腰掛けて振り返っては私に何かと話しかけられたのですが、その度毎にシュネーダー先生の手が真新しいスリッパを持っておられるのを見、不思議なちょっと異様な感じを抱いていました。学院に着き、先に降りられたシュネーダー先生はそのスリッパを玄関の敷台に揃え、「どうぞ」と私たちに促されました。その時のショックというか、感動を、65年を閲した今も私は忘れることが出来ません。その時先生は院長であり、創立50周年記念式典の主催者であったのです。

シュネーダー先生は明治初期の来日以来、私の祖父方義と同志であり、祖父の院長辞任後の第二代院長でありましたから、私の幼年期にもよく東京芝の祖父宅にみえ、私は可愛がっていただきましたけれども、もうこの時私は早稲田の高等学院生でした。

愛というより、自然に湛えられた心遣いの温かさというものを私はこの時先生から意識しました。そして以来、東北学院の名を聞くと思い浮かぶのがこの温かさになりました。

第二次世界大戦――太平洋戦争が終わってから半世紀余が過ぎますが、この頃つくづく私は、日本はやっぱり負けたのだと感じます。敗戦によって自由な民主社会となり、戦前とは比較にならぬ富裕な民主国家になりましたが、何か大きなものを失ったのではないでしょうか。人間同士の温かい思い遣りの心です。会社、官庁の汚職から殺人強盗裏切りなどの日常化です。真っ先に何事も人を思いやる温かさの欠如です。今日のわが国の「学校」はあまりにも知識の教育で事足れりとなってはいないだろうか。人間の因って立つ人生をないがしろにしてはいないだろうか。

私はこんなことを痛感する度に、いつもシュネーダー先生が手にされた私のためのスリッパのことを思い出すのです。

プロフィール　OSHIKAWA, Sho-ichi

1917（大正6）年生まれ
早稲田大学政治経済学部卒業
押川方義の孫で戯曲作家
劇団前進座、文化座を経て明星学園和光大学講師等を歴任、劇作に従う。
「押川昌一戯曲集」「馬車道の女」「ケルナー先生の胸像」等がある。

シュネーダー先生の面影

松山 国夫

二代院長
D.B.シュネーダー

1857（安政4）年3月、ペンシルヴェニア州ボウマンズヴィルで出生。
1938（昭和13）年10月、81歳で逝去。
院長在職期間：明治34年8月～昭和11年4月

D.B.シュネーダーとその妻
A.M.シュネーダー

シュネーダー先生がながい航海ののち、雪をいただいて朝日に輝く壮麗な富士山に迎えられて横浜港に入港し、明治21年の元旦に仙台駅にお着きになり、東北学院に赴任されたのは今から113年前であります。先生は明治34年に初代院長押川方義先生のあとをついで第二代院長に就任せられ、東北学院こんにちの発展の基礎をしっかりとおつくりになりました。

翌年、結成された同窓会は先生のご期待どおり母校の大きな支えになってきましたが、先生は多くの同窓生が世の中の幸福の源となるような立派な働きをしていることを知って、よろこび、たえず彼らに奨励を送ることを最も幸せなことと考えておられました。

昭和5年4月、東北学院中学部入学式の日に私たち新入生は初めて院長シュネーダー先生と対面しましたが、流暢な日本語で話してくださる先生の御温顔に接して“今日から自分も学院生になった”という自覚を心に刻み付けることができました。中学一年生の授業で担当の先生から「君たちは院長を親とした学院家族の兄弟だよ」と教えられたときの深い感銘を覚えております。私たちは生徒同志で話す時はシュネーダー先生のことを“院長さん”とお呼びしておりました。家で“お父さん”と呼ぶのと同じ気持だったからです。毎週、先生が

1936（昭和11）年
神学部卒業記念

卒業する学生達を社交館に招待するシュネーダー夫妻
学生の多くは、その折り生まれて初めて洋食の食べ方を習った

1932（昭和7）年
高等学部陸上競技優勝カップ

礼拝でご奨励をなさる日には奥様も私たちと同じ席につき、いろいろアドバイスをしてくださいました。昭和10年1月、中学部の卒業試験終了日の夕刻、院長夫妻主催の晩餐会に招かれた生徒一同は、晴れ晴れした気持で社交館に集まりました。はじめてナイフやフォークを手にしてやや緊張しながらも、とても嬉しい気持で隣の友達と顔を見合わせる私たちの間をまわりながら、忙しくお世話くださる奥様と教え子たちを院長さんのお顔が見守ってくださいました。この席で、いただいたお言葉「あなたがたは神のため、そして日本のために偉大な仕事をする人になれるように日々努力をつづけてください」を先生は奥様と揃って写されたお姿とともに、卒業式の日に渡された記念アルバムを通して、いまも私たちに送ってくださるのです。

昭和11年、学院は創立50周年を迎えました。5月15日の記念式典では南六軒丁（現在の土樋）の礼拝堂で院長として最後の式辞をのべ、学院の将来は過去におけるよりも一層重要であることを説き、より大なる、より善き、より力強き東北学院をまぼろしに見て、お互いに献身犠牲の精神をもって、これを実現させてゆくことを力強く訴えられました。当時、学院高等学部在学中だった私が拝見した、「校鍵」をお渡しになったシュネーダー先生と、これをお受けになった第三代院長出村悌三郎先生の厳粛なお姿を創立記念日に礼拝堂を訪れて正面のステンドグラスを仰ぐごとに思い出しております。

日本に来られてから半世紀にわたって宣教師、教師、院長として東北学院の父と慕われたシュネーダー先生は昭和13年10月5日、81歳（数え年82歳）のご生涯を終わられました。自分に与えられた才能のなかで最も優れたものを世のため、人のために献げつくし、各自の立場において「地の塩」「世の光」となることが最も光栄ある使命であることを教え、また先生自らこれを実践なさいました。

命をささげし真（まこと）の人
うたわるるいずこ
ああ東北学院

私は校歌第四節のこの歌詞の中に、いつも正確な日本語で、心豊かなお言葉を通して学院生一人ひとりを導き励ましてくださったシュネーダー先生の面影を偲ぶのであります。先生の御精神は東北学院とともに生き続ける事でありましょう。

プロフィール　MATSUYAMA, Kunio

1916（大正5）年生まれ
東北学院中学部卒業
東北学院高等学部文科第一部卒業
東北学院中学・高等学校教務主任
90周年記念事業実行委員、理事

回　想

シュネーダー記念館資料室設置までの歩み

竹井　一夫

昭和28年9月は、私にとって大きな決断の時であった。当時、私は二本松教会の牧師であった。突然降って湧いたように同時に二つの問題が訪れた。一つは東京・富士見町教会赴任のこと、一つは東北学院の学校付牧師の問題であった。そうした中で、私は昭和25年から、既に私本来の神学プロパーの問題から、日本近代史とキリスト教の研究に移っていた。これが後の、そして現在に至るまで、私の生涯を貫いた
《日本近代とプロテスタンティズム》の研究の問題であった。

結局、私は富士見町教会赴任をことわり、昭和29年4月から教務教師として、平成7年3月まで、中・高・大で過ごすことになる。その間『東北学院百年史』に編集執筆委員として10年（1981～1990）、『東北学院百年史』（通史・各論・資料編、3巻3000ページ）に、講義の傍らかかわった。

1

私が東北学院に赴任して来た当初、もっとも足繁く通ったのは「同窓会」の花輪庄三郎先生の所であった。そして先生の案内で最初に訪れた場所が、シュネーダー記念図書館（大学）であった。そんなことは知る由もなかったが、当時、花輪先生は東北学院七十年史の執筆に専念せられていた。なぜ私が同窓会室（本館二階の一番東の部屋であったと思う。一人部屋で、現在シュネーダー記念館資料室にある、古風な同院長の机が、花輪先生の事務机であった）を尋ねたかと言えば、東北学院の歴史をまず知ること―そこには日本のキリスト教主義学校の教育理念・目的・教育活動（その中での、アメリカミッションとのかかわり）・卒業生達のその後の、社会におけるさまざまな活動状況などの概括が見えること―であった。

《日本近代とプロテスタンティズム》をテーマに取り組み始めていた私は、ここに思いがけず、日本のキリスト教主義学校研究という新しい課題が与えられた。これが後年、私が百年史編集委員となるきっかけになった。東北学院図書館は私の研究宝庫（depository）となった。昭和34年から、大学でも講義を持つようになると、私と図書館、それに花輪先生とは、切り離せない関係になった。その私の広範にわたる読書研究をサポートしてくれたのは、図書館にいた荒孝夫さんであった。そこで初めて大学図書館最初の「ケルカー図書館原簿」（1892～1930）―図書館原簿洋書第1号、登記原簿和漢書第1号、和漢書区分原簿（この原簿の後半は、洋書の区分になっている）。の三冊―を見た。

2

昭和30年5月10日～15日は、創立70年記念式典挙行の日である。が、花輪先生一人執筆の『東北学院七十年史』は、まだ出来ない。代わりに発行されたのが、『東北学院創立七十年写真誌』であった。七十年史が完成するのは、それから4年後の、昭和34年7月であった。花輪先生は国語（日本文学）の先生で、随って島崎藤村研究家でもいられた。私が東北学院に勤務後、最初に大学（同窓会室）で先生にお会いした帰りがけに頂いたのが、昭和11年発行の『東北文学－五十周年記念特輯号』（第116号）で、表紙に東北学院神学部の校印のあるものであった。私にとってはこれが最初の東北学院入門書となった。昭和34年以後、私は花輪先生の手を離れた、学内資料―それは主に図書館所蔵の『東北文学』『芙蓉峰』それに大正5年1月創刊の同窓会発行の「東北学院時報」（当時、完本はなかった）―のうち、『東北文学』（特に明治期のもの）と『芙蓉峰』（労働会雑誌）を図書館から借り出し、丹念に読んだ。キリスト教学校史という、特別な理念を持った歴史記述の位置づけと、資料問題等の検討のためでもあった。それを機に私自身の新しい資料の探捜が始まった。学院創立当初の生徒の実態を知るための学籍簿であった。そのため私は大学の教務をはじめ各部署、図書館などたずねた。が、そのどこにも手掛りとなるものはなかった。ある日、私は大学でなく、ひょっとすると高校の方にあるのではないかという思いにかられた。こうして東北学院初期の成績簿・学籍簿が、思いがけず高校・第二倉庫（北校舎昇降口脇）の中で発見された。成績簿は、黒ずんだ背皮の部厚い英文のもので《Grade Register of the Tohoku Gakuin》・4冊（大正初期のまで）、学籍簿は、『東北学院学籍簿』第壱号・2冊であった。その時の感激は今も忘れない。捜し始めて10年目であった。昭和40年の冬のことである。それ以前、高校グランド・赤レンガ校舎玄関前にあった生徒の水呑場（水道）の足台の石に「1891」の数字がほられているのを、ある日ふと発見。それは「仙台神学校」（東北学院）校舎建築の年である。そこから私は、仙台空襲でその姿を消した南町通りの仙台神学校を思い出した。きっと、その焼跡の現場に立った卒業生の誰かが、この石を焼け残った母校のこの高校の赤レンガ校舎に運び込んだに違いないと。そうすると外にも何かある筈と私は思った。その時私の頭に閃いたのは、すぐ近くの赤レンガ校舎正面玄関の階段左側に口を開いている地下倉庫の入口であった。案の定そこで私は、半分に壊れた《仙臺神學校》の校名を刻んだメイン・ストンに出会う。同時に、そこには明治34年10月、新会堂建築・献堂式をあげた仙台東一番丁教会のものと思われる、高さ60㎝の真鍮の十字架像もあった。卒業生たちは、こうして伝統的な、守るべきものは護ったのだと思う。

昭和40年代に入ると大学紛争が起きた。大学キャンパス内にはバリケードが築かれた。その中で大学の重要書類

や物件の一部が高校の倉庫に移された。窓には鉄棒（鉄製）の枠や金網が取りつけられた。そうした中に、かつて花輪先生が使っていたシュネーダー院長の机、ミセス・シュネーダーのピアノなどもあった。それに直接どこの倉庫に保管していたのかわからないが、今、中央図書館貴重書展示室にある島崎藤村色紙には、斜十字の金網の影が、うつし出されている。

昭和40年代後半は、私にとっては忙しい日々の連続であった。私は第1回県芸術選奨を受賞(昭和47)する。それは私の人脈関係をさらに広げた。それを機に私は学校史研究の基礎資料調査にとりかかったのである。県の生活文化課や、学事課に新しい知人が出来たからである。こうして県庁文書の所在（県庁内にはなく、県図書館地下室倉庫所蔵、一般には非公開であった）を突きとめ、それがやがて現在の資料室にある県庁文書マイクロフィルムになるのであるが、それは10年後、百年史編集委員会ができて後のことであった。その中で、遂に発見出来なかったのは、肝心の「仙台神学校設置願」で、今もそれは課題の一つである。（明治学院も、東北学院同様、東京一致神学校→明治学院神学部となるが、その最初の届出文書は、見つからない。）その間私は自ら歩き基礎資料調査を始めていた。七十年史・学校史の補足部分、仙台キリスト教史（後の『黎明期の仙台キリスト教』になる）、押川方義（後の『押川方義』）、花輪先生―先生がなくなられるのは昭和58年3月であった―が残された『東北文学』（明26・10創刊）の文学者達の研究を、私は細かく追求して行った。それらはすべて思いがけず、後の『東北学院百年史』三巻に役立った。（当時私は、後年、自分が東北学院百年史に関係するなどとは思っても見ていなかった。ただそれが二本松教会時代以来の、私の抱いていたテーマであったことだけは言える。）

その中で、中高の赤レンガ校舎が取りこわされ、新しくそこにレンガ色のシュネーダー記念館が建設せられるのは、昭和55年3月（献堂式）のことであった。取りこわしが始まったのはその前年の3月10日ころからであった。学校は春休みに入っていた。私は毎日出校と現場の様子を眺めていた。それは、この校舎の「礎石」（大11・6落成）とそこにある筈の「カプセル文書」に並々ならぬ関心を持っていたので、その作業工程を見つめるためであった。それにもう一つ重要なことは、「LIFE LIGHT LOVE」のシュネーダー院長の学校標語（建学の精神）は、そのコンクリート枠組ごと、きれいに取り外し、保存したいと思った。が、これは構造上不可能だということで、止むなく三Lの、最初のL文字から逐次はがしていった。その裏側に、私はいちいちマジックで番号（1、2、3…）を書いて行った。三Lには同じ文字が幾つかあるからである。最後は太い綱をかけて、赤レンガの外壁を倒すのである。その時の情景と地響きを立て、大音響と共に倒れる赤レンガ校舎の最後の姿は、今も鮮烈に私の記憶の底に残っている。この礎石文書については、その直後発行の学院時報に書いている。そこには大正11年定礎時の文書だけでなく、明治期（38年を含む）の文書、物件が入っていた。こうして新しく中高に赤レンガ色4階建ての「シュネーダー記念館」が誕生する。

その4階は、図書館で、東一番丁通りに面した細長い一室が、シュネーダー記念室（後の資料室）として予定されたものである。

こうして間もなく、法人本部（当時の担当：板垣さん）と連絡をとり、室内設計図（案）、それに付帯設備（展示台、ガラスケース、事務机等）の見積り書案を私が出し、完成することになる。が、この資料室は中高内にあったが、法人本部の管理下にあった。これが現在あるシュネーダー記念資料室である。上記、時系列的に列記した物件資料を含めて、仙台神学校（東北学院）関係資料―東北学院基礎資料の重要部分をなす資料―が、ここにはあった。昭和33年には、中高校北校舎が完成する。その際、明治38年落成の普通科（中高）校舎の校門は、この北校舎校門として、現在の位置に移された。

ここに忘れ難いことが一つある。それは南町通りの仙建ビル（昭和58年竣工）の建設工事のことである。今はその面影は何一つないが、この地がかつての「東北学院」（仙台神学校）発祥の地である。『東北学院の100年』（写真誌）には、生前この建物を知る、太平洋画会の画家布施悌次郎氏（布施淡 二男）が描いた「仙台神学校」（油彩）がある。赤レンガ造り方形五層の塔を持つ、典雅で、ゴシック式シャトウ風な建造物で、現存していたら、仙台の重要文化財ともなる惜しまれる校舎で、仙台空襲で潰滅、焼失したものである。そのビル工事が、遮蔽された白い鉄壁の向こう側で始まった。クレーン車が頻りに動いている。基礎工事のために、焼跡の地面を堀り起しているのだ。私は学校に引き返し出来るだけ多くの、そこにいた生徒たちを引っつれて再び現場に戻った。そして工事現場の責任者と交渉、そこから掘り出された赤レンガを、生徒各自に持てるだけ持たせて学校に帰った。3年後、私たちは創立100年を迎える。この赤レンガでそのための記念碑をつくろう、そう私は考えたのだが、それは遂に実現することはなかった。その一部は、現在、資料室の礎石のまわりを取り囲むように、置かれている。

3

シュネーダー記念館資料室はこうして出来た。中高資料として集めたのは、戦後の『東北文学』のバックナンバー、中高校発行の新聞類等が主で、東北学院につらなる人物写真、それらの人たちの著書、伝記などは、中高のものというよりは、一般にオール学院にかかわるものであった。百年史編集委員会は既に発足していた。仙建工業には中高大（工学部）卒業のC氏がいる。そんなこともあって、いつの日か、あのビル前の植栽の一隅に、私は布施悌次郎氏の油彩をはめこんだ、小さな碑《東北学院発祥の地》の、建立されることを夢見る。

編集者より、苦労話をも含めてということであったので、思い出すままをここに書いた。

プロフィール TAKEI, Kazuo

1922（大正11）年生まれ
東京神学大学（旧日本基督教神学専門学校）卒業
東北学院中学・高等学校宗教主任
「東北学院百年史」編集執筆委員。
藤一也の名で、詩人・評論家として著書多数。

青根セミナーハウス旧館（自然科学研究室青根分室）

青根セミナーハウスの思い出
－青根分室建設と自炊－

石川　大

昭和33年夏のある日、小田忠夫学長を川崎町営のアパートにお伺いしたら、「青根の何方か東北学院に1,000坪の土地を寄付して下さる方は居りませんか」とおっしゃるので、どうしてですかと申し上げたら「六軒丁は学生が多くなり手狭になったので青根に先生と学生、また学生同志で自由に宿泊できる教育施設がほしい」、それでは私の主人の佐藤仁右衛門氏（青根温泉「湯元不忘閣」当主）に先生の考えをお伝えいたしますと言ってアパートを辞しました。

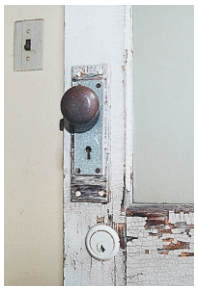
同年9月始めに、五十嵐正躬理事、佐藤三太郎事務局長が佐藤仁右衛門氏をお訪ねになり、10月末頃に小田学長ご夫妻、五十嵐理事、佐藤事務局長、鈴木国太郎技術職員が佐藤仁右衛門氏の案内で、町内3ヶ所を下見し現在の場所に決められたのです。

昭和34年6月より大工さんたちは、民家に下宿しての建築が始まり、同年10月中頃に建築も終り、同年11月始めには献堂式が執り行われ、東北学院大学自然科学研究室青根分室と称され、私が管理人として入居することになった。この土地の件については、小田学長ご夫妻と佐藤仁右衛門氏と先々代からの深い

1959（昭和34）年10月
宣教師住宅の移築前

階段

2階和室



ドアノブ

2001（平成13）年10月
青根セミナーハウス旧館解体中

つながりがあった事を忘却する事はできない。

昭和35年、今年度より行われる事になった、東北学院大学新入生オリエンテーションのための学生リーダーのトレーニングキャンプが青根分室のオープニングセレモニーとなった。

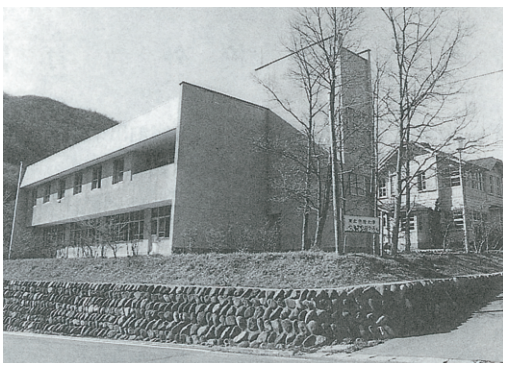
新学期より学生の使用が許可され、昭和42年3月末日までの7年間、いろいろな事がありました。

この施設は自炊で、水道蛇口が一つ、煮焼き用コンロが二つ、炊飯用「蒸釜」一つが備え付けられ、なかでも学生を困らせたのは蒸し釜であった。家内が使い方を教えて来るのですが、勉強やお喋りに夢中でいると、ご飯は焦げてしまう事が多かった。またご飯釜が蕩けた事も何回かありました。風呂が無く町の共同浴場を無料で使用して居り、冬には、帰りにタオルが直ぐに凍ったといって寒さに驚いていた。春休みに来た「ESS」の女子学生が、調理中に一酸化炭素中毒で倒れ大騒ぎとなり、蔵王町の大泉記念病院に車で運び込んだことなどが心に残る思い出です。

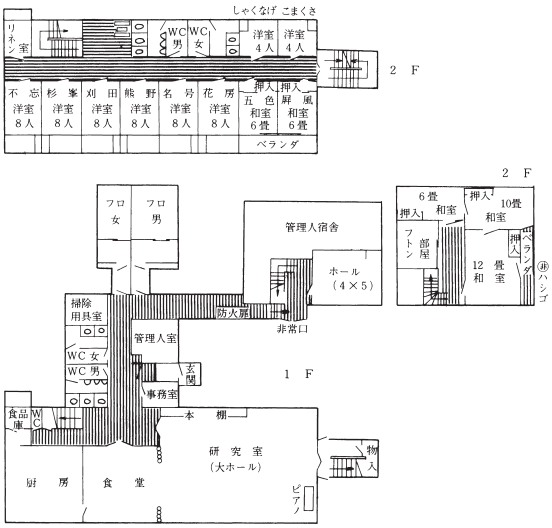
また、昭和39年頃より学生課では、セミナーハウスの新築の計画が進められた。建物は、自然科学研究室と1階部分でつながるように設計され、鉄筋コンクリート2階建であった。昭和41年春、新築の槌音は青根の山々に響き、同年12月に献堂式が挙行された。青根旅館組合からは校章入りの演台が寄贈され、旅館と在校生のお母さん方には、式の前日は館内の清掃、当日は接待などのお手伝いをいただき、青根温泉街をあげての歓迎式典であった事を思い出す。

昭和42年の春休みより、温泉と食事付き一泊三食780円のセミナーハウスの運営が始まったのである。4月1日学生課を上手に乗せ、そして震撼させたリーダー合宿のエイプリールフール事件、学生時代ゼミの合宿に度々来ていた本学教授山本展雅先生との出会い、敬和会の折詰弁当を家内と徹夜で造った事、夏休み中延べ3,000人の宿泊学生を捌くのに泊まりがけで支援して下さったセミナー担当の学生課職員、リーダー会有志の方々、私の還暦の祝を計画し実行して下さった、リーダー会ゼミのOBと学生の皆さん、そして、セミナーハウスを利用したOBと学生の皆さん誠に有難うございました。

最後に、昭和35年から平成11年3月迄39年間青根分室、セミナーハウスを利用して下さった当時の学生諸君、諸先生方、私たち夫婦を支えていただき心から感謝と御礼を申し上げ筆をおきます。



1966（昭和41）年12月
青根セミナーハウス新館完成



プロフィール　ISHIKAWA, Hiroshi

1930（昭和5）年生まれ
白石中学卒業
東北学院専門学校経済科卒業
東北学院大学財務部、学生課
（青根セミナーハウス）勤務退職

東北学院資料室開設にあたって

東北学院大学副学長
出村　彰

創立から115年を閲して、ようやく資料室の開設に漕ぎ着けたことは慶賀の至りです。百年史編纂の過程で、多大な労力と経費をかけて収集した膨大な資料の一部を、ともあれ保存・展示する場を与えられたことになります。もっとも、実際は展示できた量と比べれば、依然として別室に残されたままの貴重な図書・物品の数量は、比較にならないほど大きいのです。いずれ、それらも陽の目を見る機会と場所が与えられることを切望しております。

これまで展示可能となった資料からも明らかですが、東北学院の創立から維持、発展がいかに困苦に満ちたものだったかを改めて思わせられます。近年、私学一般、特にキリスト教に立脚する諸学校の今後についての危惧がしばしば語られます。教育機関であるからには、他の学校と対等に勝負ができなければ話になりませんでしょう。

しかし、120年にも満たない歴史の中で、日本の敗戦（1945年）まで、つまり60年間は、キリスト教学校は、日本の社会では、いわば大括弧の外側にマイナス符合の付いた存在、当時の表現を借りれば、「国体の精

ラーハウザー記念礼拝堂地階に開室

仙台神学校舎模型（中央）と玄関コーナーストーン

プロフィール DEMURA, Akira

1933（昭和8）年生まれ
東北学院大学文経学部英文学科卒業
東京神学大学・イエール大学
プリンストン神学大学・バーゼル大学大学院
神学博士、東北学院大学宗教部長、
百周年記念史編集委員主任、
学務担当副学長

華」とはあい反すると見なされる存在だったわけです。

いずれ公にすべきと思いますが、太平洋戦争勃発のその年まで、アメリカの母教会は多大の援助を送り続けたのです。その額はほぼ当時の人件費総額にさえも相当します。ついでに言えば、現在は国や県の公費補助は予算総額の10パーセントにさえ達しません。なお、援助は校舎などの建築に当たっては別個に送られて来ました。忘れてならない史実です。それにもかかわらず、東北学院の存在が「楽」だったことなどは決してなかったのです。これまた当時の言い方を用いれば、「主義・主張を持つ」学校の存在そのものが異質的だったからです。

戦後の数十年、東北学院は大学も中高も日本の内外で相応の発展を許されて来ました。

しかし、先人の辛酸・労苦を思い、感謝の念を失うことなく、謙虚になりたいものと思います。新設の資料室がそのよすがともなればと念じてやみません。

在米同窓生から寄贈された礼拝用の鐘

東北学院の沿革

回　想

土樋キャンパス物語

文学部教授
志子田　光　雄

Ⅰ. 藩政時代

伊達政宗が400年前に仙台を開府した当初の都市計画の絵図を見ますと、侍屋敷の敷地としての南東端は、ちょうど東北学院の敷地の辺りになります。現在の6、7、8号館の東側に幅1.5メートルほどの堀が南北に流れており、昭和に入ってからは、田町の紅久味噌醤油醸造店から流れ出た排水のためドブになっていましたが、その掘割を境として西側が侍屋敷、東側が町人の住まいと分れていました。東側は町人の町割でしたが、開府から66年後の絵図では、田町から南に下がる猿曳丁、現在の図書館前の通りができ、侍屋敷となって東の方に急速に発展していったようです。

正門前の通りは南六軒丁と称しましたが、昔この通りに6軒の武家屋敷があったからです。どのような侍が住んでいたかは時代によって異なりますが、寛文4(1664)年の仙台城下町の地図では、南六軒丁の南側に東から砂金佐渡、柴田外記、佐藤新冶郎、北側（現在の東北大学の敷地）には東から村田玄蕃、小梁川中務、大条監物という仙台藩の重臣の名前が見えます。

現在の東北学院大学本館のある辺りは奉行柴田外記の屋敷でした。柴田外記は、いわゆる伊達騒動の折、仙台藩の重臣の一人としてこの事件にかかわっております。騒動のクライマックスである江戸の老中酒井雅楽頭邸においてこれら重臣たちが尋問されたとき、原田甲斐が突然伊達安芸を斬り殺し、さらに幕府の重臣のいる奥に入ろうとしたので、柴田外記、古内志摩、蜂屋六左衛門が追いかけて甲斐を斬殺しましたが、その立ち回りで外記は重傷を負いました。「安政補正改革仙台府絵図」では、柴田外記の名は消えています。

開府当時、南六軒丁から片平丁にかけて、柴田外記、大条監物、伊達式部（登米）、伊達弾正(岩出山)、石川民部(角田)、田村右京(岩沼)、伊達左兵衛（岩谷堂）、原田甲斐など大身の侍の屋敷が並び、江戸から仙台城下の中心である芭蕉の辻に至る街道が通っていた田町から西にそれて、東南方向から仙台城へ一直線に最短距離で通じる重要な通りの入り口を南六軒丁は扼していたと言えるでしょう。

土樋の名称は、鹿の子清水一帯からの豊富な湧水を広瀬川に直接排水しないで、東西に敷設された土を固めた樋で孫兵衛堀まで流し、仙台の東側一帯の灌漑に用いていたところから生まれました。開府と同時に広瀬川沿いに松源寺が建てられ、現在の土樋の通りの両側には、下級侍の住いがあったようです。

Ⅱ. 明治時代

明治になってからこの土地は、東のほうから1番、2番と地番がふられ、西端は6番となっていました。東半分、すなわち1番から3番までには、一時初代の仙台市長であった遠藤庸冶が住んでいました。彼は、伊達藩の藩校であった養賢堂の俊才であり、廃藩置県の後、宮城県会議員や衆議院議

員を勤め、その間明治22年から26年までは初代市長として、明治43年から大正3年には再び五代目市長として敏腕を振るっています。雅号が「対宕館主人」となっているので、愛宕山を望んで今の学院の本館のあたりに居を構えていたことが分かります。明治34年の「仙台市名家及実業家一覧図」には、遠藤氏邸宅と記載されています。彼は多くの業績を残していますが、とりわけ植林を良くし、植物が好きであったため、全国から珍しい樹木を集め、それをこの南六軒丁の屋敷に植えていました。そのため、東北学院が専門部の校舎を建設した後も、このキャンパスには、昼なお暗いほど鬱蒼と樹木が茂り、かなり珍しい木も多く、植物の宝庫でした。特にくるみ類が多く、姫ぐるみ、鬼ぐるみ、珍しい西洋胡桃などが3、40本もありました。それらのほとんどが、校舎建設のたびごとにキャンパスから消え去ったことはいかにも残念です。

敷地の西半分、4番、5番、6番、すなわち現在の3号館あたりから西側は、岡家の所有でした。岡家の幕末の当主は、養賢堂から江戸の昌平黌に学び、後に養賢堂の指南役となった有名な岡千仞です。仙台藩に会津討伐の命令が下ったとき反対派のリーダー的存在でしたが、仙台藩が降伏したとき指導的な役割を果たし、藩の人心の動揺を抑えた人物です。彼は麟経堂と称する家塾を開きますが、これが学校制度の成立とともに片平丁小学校となりました。岡千仞は、大正2年2月18日に82歳でこの世を去っています。この4、5、6番の敷地のうち、4番の1と2、ならびに5番は直接岡家から、6番の1は初め在日本コングレゲーショナル宣教師社団が持っていたもの（ブラッドショー館）を在日本リフォームド宣教師社団が買い求め、後に東北学院に所有権が移転され、6番の2（デフォレスト館、いわゆるシップル館）は直接在日本コングレゲーショナル宣教師社団から購入しています。

Ⅲ. 戦災で焼失するまで

『東北学院七十年史』の776頁に「東北学院専門学校周囲並配置図」があり、戦災で焼失した建物が斜線で示されています。しかしこの図面は細部にわたって描かれていないので、私が補って画き直したものが末尾に掲載した図面です。

（1）本館と礼拝堂

本館は大正14年11月3日定礎式を行い、約1ケ年の後に完成し、大正15（1926）年9月から使用を開始しました。秋保産の石材を張り付けた高雅な外観、設備の完備等において、当時東洋一の校舎と言われたようです。その後、6年後の昭和7（1932）年3月に、同様の外観、その内部はカレッジ・ゴシック様式ともいえるラーハウザー記念礼拝堂が完成しました。現在と異なるのは、本館と礼拝堂が完全に閉ざされた（もちろん窓はありましたが）廊下でつながれていたことです。その廊下の趣は、礼拝堂南出入口から出てすぐ右手に一部残っています。この廊下は、昭和30年代前半までは残っていましたが、礼拝の終了と同時に出てくる学生によって廊下は身動きがとれなかったため取り払われ、現在のように開放された空間となりました。

愛宕山から望んだ高等学部時代の校舎

今でこそ修復されたためその痕跡を探すことは困難ですが、戦争の爪あとはこの二つの建物にも及びました。昭和18年の金属献納です。ある暑い日、戦闘帽をかぶった男たちに指揮され、手ぬぐいで頬被りした婦人会の人たちを含む近隣の住民も狩り出され、何か罪意識に苛まれていたかのような迅速さで、めぼしい金属類を剥ぎ取っていきました。二つの建物から、銀色に輝くラジエーターがすべてはずされ、本館の階段や礼拝堂入口の手すりを支えていた1センチ角ほどの細い鉄の支柱まで、一本おきに金鋸で切り取られました。何よりも悲しかったのは、礼拝堂の荘厳さを作り出していたシャンデリアの撤去です。高い天井からはずされた華麗な青銅色のシャンデリアは、ガラスの壊れるのもかまわずに礼拝堂の入口の前に無造作に積み重ねられました。礼拝堂の建設に5万ドルを献金したラーハウザー嬢を称える入口右側の壁に張り付けてある記念碑は、幸い立てかけてあった板の陰になって発見されず、入口外側の二基の外灯も開いていた扉の陰になっていて、半分見えていたにもかかわらず発見されずにすみました。（現在礼拝堂にぶら下がっている創立百周年を前にして作られた新しいシャンデリアは、写真を基にして創られたものであると思われますが、そのデザインも材質も異なります。基本デザインは、入口に残っている

2基の外灯と同じなのです。）礼拝堂のパイプオルガンのパイプが持ち去られなかったのは奇跡としか言えません。

数日後、鉄製の正門門扉と南六軒丁通りに面した鉄柵もあっという間に撤去されました。現在、似た柵がめぐらされていますが、オリジナルの瀟洒なデザインには及びもつきません。撤去された跡には、コンクリートに一応研ぎ出しの化粧をした低い角柱が1.5メートル程の間隔で立てられ、緑色に塗られた丸太を横に渡して塀としていました。これは、昭和40年代後半の学園紛争の時、キャンパス全体に張り巡らした金網の塀が出来た後にも残っていたので記憶している方も多いでしょう。

（2）戦災で焼失した木造建造物

本館のすぐ東隣（現5号館）には昇降口があり、続いて二階建ての木造教室があって、その階下は東北学院航空専門学校になってから事務室となりました。その東側には木造平屋建ての教室が4つありました。現在5号館はグラウンドから直接立ち上っていますが、教室とグラウンドの間にはかなり広い空間がありました。この校舎の北側に廊下でつながった小さな部屋が独立してありました。陽のあたらない陰気な空間でしたが、それが当時各学校に派遣されていた配属将校の部屋になっていたのです。

この教室の北側には日本家屋の校宅がありました。はじめは出村悌三郎院長宅でしたが、院長が現在の土樋川沿いのテニスコートのある敷地にあった西洋館に移った後、私たち一家が住むことを命ぜられ、最初住んでいた南六軒丁に面した校宅（現大学院の建物の北の部分）から移り住みました。この校宅の一部は後に廊下で教室棟とつながれ、戦時中の短い期間、校宅のうち八畳4部屋が寮として用いられました。その廊下の途中からは学生の部室へつながっていました。当時の学生活動は鍛錬部と国防部、文化部に分けられ、鍛錬部には剣道班、弓道班、競技班、山岳班、国防部には射撃班、馬術班、滑空班、防空班、文化部には興亜班、修養班、学術研究班、音楽班、新聞雑誌班、弁論班、芸能班がありました。部室は小さいものでしたが、戦時下において、学生の部活動はほとんど行われず、部室にはあまり人影が見られませんでした。ただ、滑空班にはいつも学生がいた記憶があります。滑空班にはプライマリーとセカンダリーのグライダーがあり、大抵は宮城野原で練習していたようですが、時折プライマリーが南六軒丁のグラウンドに運ばれてきて、練習していました。グライダーの後尾を抑えておき、機首に太いゴムの引き綱をつなぎ、10人ぐらいで引いて、ある程度ゴムの綱が伸びきったところで後ろの固定索をはずす。そうすると地上を滑走するか、運がよければ1メートル程上昇し、10メーター位飛んで着地するという程度でした。

当時、本館並びの東端には雨天体操場がありました。木造平屋建で、大きさは推定16間（28.8メートル）に8間（14.4メートル）位。軍事教練の時代であったので、壁には肋木が天井まで貼り付けてあり、縄のぼりで筋力をつけるための太い縄も二本ほど天井からぶら下がっていました。

雨天体操場に隣接して武器庫がありました。ここには在学生全員分の三八歩兵銃と銃剣、軽機関銃が確か3丁、それに対戦車砲が一門ありました。この対戦車砲は砲身が1メートル足らずのもので、直径50センチぐらいの車輪がついていました。学生は時々グラウンドにそれを引き出し、グラウンドの端に沿って紐で引かれてゆく1メートル足らずの木製の戦車の模型を標的として、戦車砲の角度、方角を決めて射撃練習をしていました。

太平洋戦争が激しくなり、学生の軍事教練も強化され、1年に1度夜間行軍がありました。夕方学生たちは学校に集合し、黒の詰襟服にゲートルを巻き、学生帽をかぶり、上着の上にベルトを締めて帯剣し、歩兵銃を担いで整列し、サーベルを下げた学生の指揮官の号令一下、どこかへと出発して行きました。暗闇の中、興奮気味の学生がかなり長い隊列を組み、歩調を取って進んでゆく地響きが、今でも耳に残っています。

学生が学徒動員ですぐ軍隊に編入されることになったからでしょうか、在学中から実弾射撃の訓練をすることになり、本学にも実弾射撃場が作られました。現考古学実習室の北側に幅2メートル、長さ10メートルぐらい土を盛り上げて芝生を張り、そこに伏せの形で約25メートルほど離れた現3号館、経済資料室の下の崖に置かれた標的に向かって発射していました。敗戦色が濃く、弾丸が不足していたためか、薬きょうは紙でできていたらしく、引き金を引くと、銃口から煙とともに紙切れがパッと散りました。あとで現場に行ってみると、和紙のようなものが落ちていたことを記憶しています。射撃のある日は前から知らされていて、そこに近寄るなと言われていたが、物陰に隠れてなるべく近くまで行き、眺めていました。歩兵銃の発射の音は、実弾ではなかったせいか、迫力がありませんでした。

グラウンドでは、軍事教官による定期的な軍事教練が行われていました。そのうちに学徒動員の勤労奉仕が始まり、多賀城や苦竹の軍需工廠、田舎

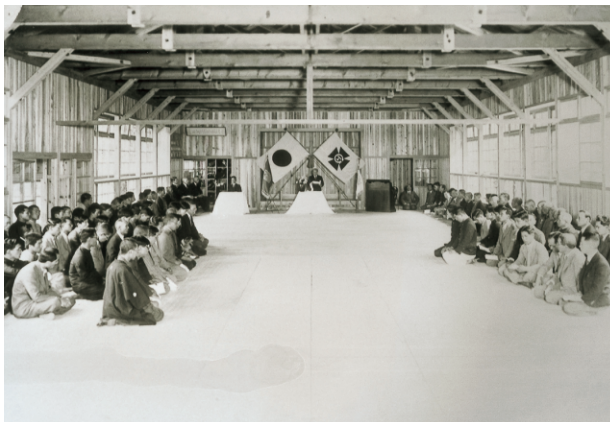
の農作業に狩り出され、キャンパスには学生の姿がほとんど見られなくなり、教室から学生の声が聞こえてきた記憶はあまりありません。

雨天体操場の北側、キャンパスの一番東側には、弓道場がありました。学生たちが威勢よく弓を引いていましたが、戦争が激しくなると学生の姿が無くなり、戦争末期にはほとんど廃屋に近かったようです。

正門を入って左側、現在大学院の建物があるあたりにはアカシヤの並木があり、その中央に美術部のアトリエがありました。赤い屋根に白いペンキ塗りの小さな建物で、一間半四方もあったでしょうか。この建物は、戦災で焼かれる前に解体された記憶があります。

（3）戦災で焼失しなかった木造建築物

現在７号館がある場所に、野間記念道場がありました。昭和11（1936）年6月11日に落成した柔道と剣道の道場です。野間とは、報知新聞社の野間清治社長のことで、『朝日』、『キング』、『講談』など9つの大衆雑誌を刊行し、知識層を代表する「岩



野間清治記念道場落成式（昭和11年6月17日）

波文化」に対して一般大衆を代表する「講談社文化」を打ち立てた雑誌界の王者として有名でした。野間社長は日ごろ、シュネーダー院長の人格を慕い親しい間柄でしたが、たまたま院長が高等学部の道場建築の必要に迫られていることを聞き、柔道、剣道の道場も武技を通じて行う精神鍛錬の場であるとの見地から、建築費用総額を寄付されたのです。総工費は6千円、大きさは東西15間（27メートル）、南北6間（10.8メートル）、出窓と掃き出し窓を備えた豪壮な木造建築でありました。東半分が剣道場、西半分が柔道場で、仕切りは板戸であったので、はずすと大広間になりました。戦時中この建物は軍に接収され、軍需物資の倉庫に使われていたため、戦災の火が十数メートル先の建物を焼き尽くしたのに、軍隊の消火活動により、奇跡的に残りました。その軍隊とは、南六軒丁をはさんで北側の現在東北大学のテニスコートとなっている場所にバラックの兵舎を建てて駐屯していた一隊です。高射砲隊と聞いていましたが、高射砲は一門も持っていないようでした。終戦後は、日本の武道は完全に禁止されたため、柔道、剣道に用いられることはなくなり、演劇の練習や、集会に用いられておりました。やがて新制大学になり、昭和25年には理科実験室に改造されて暫く用いられていましたが、現7号館が建設されるにあたり、解体されてキャンパスの南西に運ばれ、その材木は現在の考古学実習室となって残っています。

戦災の被害はキャンパスの西側には及ばなかったため、いくつかの木造建築物が残っていました。現2号館の場所にあった平屋建て木造教室は戦時中被服廠に接収され、後に2号館建設のために直角に移動させられて礼拝堂と平行に置かれ、剣道場、空手道場、あるいは卓球室として用いられました。現3号館の場所には、シュネーダー館とほぼ相似のブラッドショー館が建っており、戦時中は宣教師が置いていった家具や品物があふれるほど収容されていました。しかし、後に海軍の地方部に接収され、戦後は一部教職員の住宅となり、他の部屋は学生の部室として使用され、かなり荒れた末、3号館建設のため解体されました。その北側、南六軒丁に面してシュネーダー記念館がありました。当初東三番町にあった木造二階建てのシュネーダー院長の住宅が解体され、一部がこの場所に移築されて記念館とされたのです。現4号館を建設するため取り壊されるまで、一部は教職員住宅として、一部はYMCAの部屋として用いられました。通称シップル館と呼ばれているデフォレスト館は、戦時中一時、以下に述べる萱場資郎、そして後には宮城音五郎の表札が掲げてあったと記憶しています。いずれも当人たちは住んでいなかったので、これは軍隊の接収を避けるためであったようです。

（4）キャンパスにあった2機の飛行機

戦局が悪化してきたとき、文科系の学校、特にキリスト教系の学校は廃校される危機に立たされました。東北学院は存続を図るため、東北大学に援助を求め、当時の学長熊谷岱蔵先生の協力を得て、宮城音五郎東北大学工学部長を校長に迎え、ほとんどが東北大学工学部航空科の教授、助教授の陣容で東北学院航空専門学校に変身しました。しかし、これには、大正15年東北学院中学部卒、萱場製作所の萱場資郎社長の絶大なる支援を得て出来たといっても過言ではありません。当時萱場製作所はオートジャイロを製作していました。オートジャ

イロとは、普通の飛行機のように先端のプロペラで前進するが、主翼が無く、ヘリコプターと同様の回転翼で浮揚し、垂直離着陸が可能な航空機です。中国大陸で大砲の着弾を確認するため初めは観測気球が用いられていましたが、打ち落とされることが多かったため、このオートジャイロが開発されたのです。正式には陸軍萱場『カ号』観測オートジャイロと呼ばれ、98機製作されたと記録されています。学院のグラウンドにも一度着陸したことを記憶しています。

東北学院航空専門学校は、昭和19年4月、即ち終戦の1年半前に開校しましたが、そのとき教材として2機の飛行機が構内に運ばれてきました。1機は、当時の日本では珍しい液冷で、3枚プロペラの単発複座の軽爆撃機です。軍用機として活躍した記録は無いため、甘いグリスのにおいとともに細部にわたり記憶している事柄を頼りに調べてみましたが、実戦機としては量産されなかった川崎式単発軽爆撃機であろうと推測されます。礼拝堂の東側に堂々の姿を見せていました。現大学院入口前に置かれたもう1機は、ベニヤ板張りの小さな単発の飛行機で、特別攻撃機だということでした。これらの飛行機の他に、学内には航空機の部品がいたるところにありました。本館一階の廊下や、東端の階段の下の空間には、星状（星型）エンジンがごろごろ転がっていました。終戦と同時に、進駐軍が来て、飛行機は分解してトラックで運び出し、エンジンは野間道場の西側の空き地でガソリンをかけて燃やしました。ベニヤの特攻機は、空襲の火災で焼失しておりました。

Ⅳ. 仙台空襲とキャンパスの被災

仙台空襲は昭和20（1945）年7月9日（月曜日）夜です。当日は私の父が宿直でしたが、宿直日誌には次のように記されています。『巡視午後8時、同9時40分、警戒警報午後9時40分頃発令、10時20分解除』とありますが、その直後11時過ぎ、警報もなしに轟音がとどろき空襲が始まりました。後で調べたところ、アメリカの公文書ではＢ29が128機次々に飛来し、最初は確か師団司令部のあった川内方面から、そして市の中央部へと焼夷弾を落していきました。父が飛んで帰ってきて、われわれを防空壕に入れ、再び「書類を避難してくるから」と言い残し、布団をかぶってグラウンドの方に走って行きましたが、その直後学院のキャンパスにもまるで雨でも降ってきたかのような音とともに焼夷弾が落下してきました。学院に焼夷弾が落ちたのは爆撃の最終コースのようで、キャンパスの木造の建物はようやく炎を上げ始めていたが、まだ形はありました。木造の事務室から書類を運び出して戻ってきた父とともに防空壕を出たころ、市の中央部は真っ赤な空となっており、トタン板が多数舞い上がっていました。私たちは田町に出て、猿曳丁を下りましたが、現図書館の前あたりで頭を割られて死んでいたおばあさんをまたぎながら土樋に到り、そのあと、今の愛宕大橋の北側にある三角公園の防空壕に入りました。

翌朝、戻ってみると、本館から東側は見事に焼失し、グラウンドの中央には直径10メートルほど、深さ5、6メートルのすり鉢状の穴があいていました。『東北学院七十年史』では爆弾が落ちたとなっていますが、そうではありません。当日投下された焼夷弾は親子焼夷弾（正式には収束焼夷弾）といい、中央の芯の周りに直径6、7センチ、長さ50センチぐらい、着地する下の部分に5、6センチの鉛の錘がついていて、その上2センチぐらいのところに信管となる突起が出ているものが、80発以上クラスター状に束ねられており、落ちてくるときに羽が回転して、その回転が一定の速度になったとき分解し、子供焼夷弾がばら撒かれる構造になっていたのです。記録によれば当日は3千メーター上空から爆撃したことになっていますが、学院のグラウンドの真中に落ちたのはその芯にあたる部分であり、その周りに大体3メーターおきに燃えて白くなった金属の筒が突っ立っている様は不気味でした。

仙台市の戦災焼失地域図から判断すると、東北学院キャンパスに落ちたものははぐれ焼夷弾といえるもので、学院のグラウンドに芯の部分が落ち、その周りに散らばった80発以上の焼夷弾は、大体直径百メートルの範囲内に落下しました。1、2発は礼拝堂の屋根にも落ち、そのためしばらくは雨漏りがし、私が学生の頃も完全に修復されず、しみが壁ににじんでいました。幸い本館にはあまり火が入りませんでしたが、今でも本館西端の秋保岩の壁に、火のために変色した部分が見られます。グ

当時の当直日誌

ラウンド中央のすり鉢状の穴は、土で埋められましたが、しばらくその部分だけ黒く変色していて、雨が降ると水がたまり、昭和27年の国体のサッカー会場になったとき整地され、はじめてその跡が消えました。

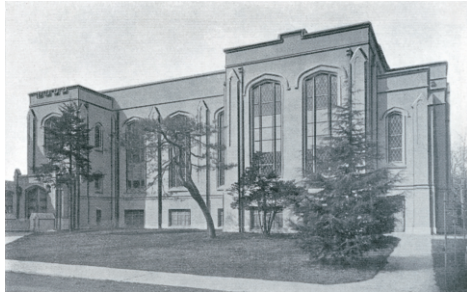
Ⅴ. つらい記憶

戦争末期、礼拝堂のステンドグラスの上には、真っ白に塗られた板が張られ、その中央に日章旗が常時掲げられていました。そして、礼拝堂の南西端の小部屋、現祈祷室の北側の棚には大きな白木の神棚が置かれていました。終戦の日、わずかの教職員が礼拝堂に集まり、ラジオから流れる天皇の詔勅を聞きました（私は礼拝堂の外の窓の下で聞いていました）。翌日、父は礼拝堂から件の神棚を持ち出し、シュネーダー記念館の前の空地で、「さっぱり（戦争には）ご利益のない神様だった」と言いながら火をかけましたが、あっという間に燃え尽きました。

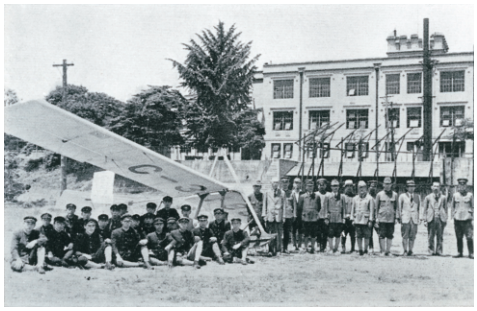
航空専門学校、日章旗、神棚、敵性学校とまで言われた東北学院が生き残るためにはつらい選択でありました。天皇は終戦の詔勅で『堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ』と述べましたが、当時の学院を守った人々、特に責任ある方々は、まさに極限まで『堪え難きを堪え、忍び難きを忍んで』いたと言えるでしょう。

（終戦当時満10歳であった私の記憶を基にして書いておりますので、誤りがあるかもしれません。ご教示いただければ幸いです）

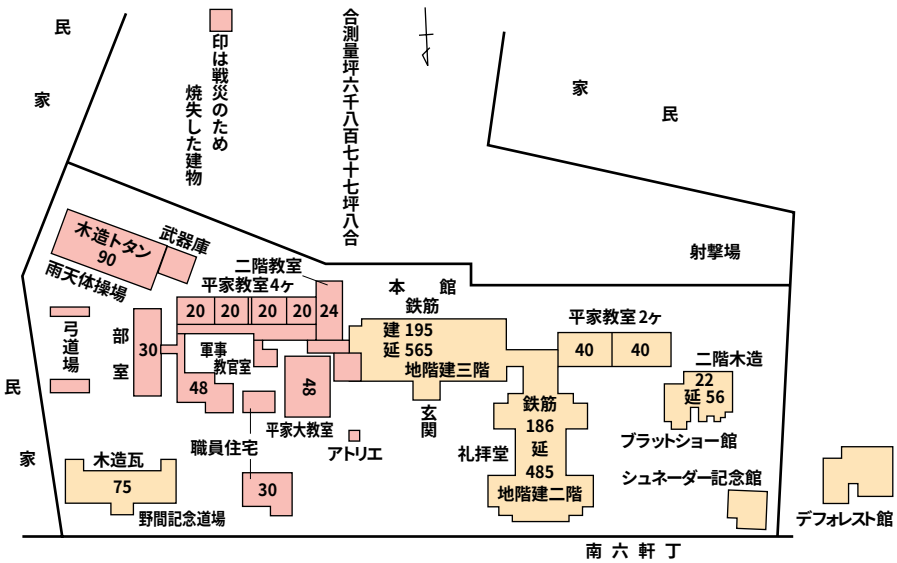
新装成る専門部校舎


ラーハウザー記念礼拝堂

礼拝堂内部


グライダー部

東北学院専門学校周囲並配置図



プロフィール SHIKODA, Mitsuo

1934（昭和9）年生まれ
東北学院中学・高等学校卒業
東北学院大学文経学部英文学科卒業
東北大学大学院・ペンシルベニア大学大学院
百周年記念史編集委員、国際交流センター所長、英文学科長

大学初のホームカミングデー

受付風景

大学初のホーム

第1回 ホーム カミングデー 『同窓祭』

2000年10月14日(土)ホームカミングデー〈同窓祭〉は、東北学院大学を卒業されて20年目、30年目、40年目、50年目の方々をお迎えして、同窓生相互の親睦と現役学生や教職員との交流を通して親交の輪を広げ、また同窓生と本学との絆を深める願

受付風景

押川方義生誕150周年記念礼拝

押川方義生誕150周年記念礼拝
説教者：小笠原政敏氏（本学名誉教授）『福音の力』

同窓生代表ごあいさつ
京極昭氏（昭和25年卒業生）
河北ビル代表取締役社長
東北ハンドレッド社長

大学のシンボルマークの披露と表彰
丸山道則氏（グラフィックデザイナー）の作品に決定

2000年度学生懸賞論文優秀賞表彰
勅使原奨治さん（二部経3年）

特別公開講演
講師：小関多賀美氏（平成4年大学院土木工学専攻修士課程修了）現在三機工業株式会社開発部勤務
演題：『未知なる大陸・南昭和基地での一年』

特別公開講演
講師：塩川孝泰（工学部教授）
演題：『無線通信とアンテナ技術の変遷 －短波通信からパーソナル通信へ－』

ホームカミングデー　昼食会・乾杯
出村彰副学長（右）　フィリップ・グロー氏（左）

カミングデー

**“ 懐かしい
出会いが
そこにある ”**

平成12年10月14日(土)

いから土樋キャンパスで行われました。会場のあちこちに懐かしい顔、かお、顔。再会の輪が広がり、参加した一人ひとりが、今日の母校キャンパスに感動し、同時に開催された大学祭も懐かしみ、胸一杯に青春にタイムスリップして楽しんだようです。

スピーチ：佐伯康全氏（昭和35年卒業生）

スピーチ：工藤千鶴子氏（昭和45年卒業生）

スピーチ：下屋光洋氏（昭和55年卒業生）

交歓の輪が広がる昼食会場

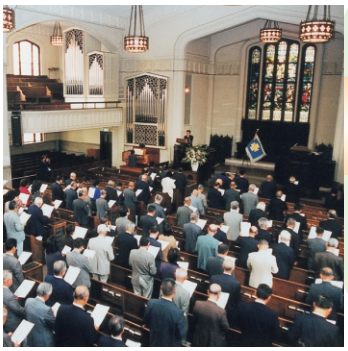
第２回ホームカミングデー

受付風景

第２回 ホーム カミングデー 『同窓祭』

平成13年10月13日(土)

受付風景


記念礼拝

田口誠一
理事長・学院長・同窓会会長あいさつ

倉松功 学長あいさつ

記念礼拝
説教者：佐々木哲夫 宗教部長

同窓生代表ごあいさつ
北島宏一氏（昭和36年卒業生）
社会福祉法人仙台キリスト教育児院理事

特別講演会
講演者：西山良雄氏（本学名誉教授・元文学部長）
演題：『長歌して旧遊を懐う（李白）
ー私の学院生時代あれこれー』

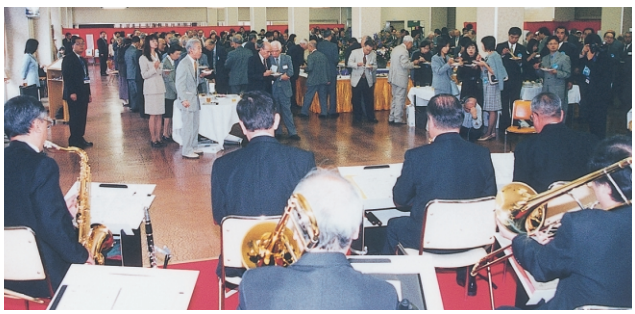
2001年度学生懸賞論文表彰
佳作　葛西真理子さん（史1）・左側
佳作　相沢理恵さん　（経1）・右側

東北学院資料室特別展

グレーテル・ファート日本画展

スピーチ
菊池恵一氏（昭和56年卒業生）

スピーチ
黒川和一氏（昭和18年卒業生）



交歓の輪が広がる昼食会場

東北学院の沿革

西暦	元号	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1886年	明治19年		ウィリアム・E・ホーイ仙台着任（1月）。押川方義、ウィリアム・E・ホーイの両名の協力により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通りに「仙臺神學校」（5月）を開設。最初の生徒は6名であった。E.R.プルボー、M.B.オールトが来日（7月）、宮城女学校（現在の「宮城学院」）を創立（9月）
1887年	明治20年		東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙臺神學校をここへ移す（5月）
1888年	明治21年		D.B.シュネーダー夫妻仙台着任（1月）。オールト記念館落成（11月）
1891年	明治24年		南町通りに新校舎が完成（9月）。校名を「東北学院」と改称し、神学生のみに限らず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科2年・本科4年・神学部3年とする。
1892年	明治25年	押川 方義	労働会創設（3月）。東北学院理事局を組織、初代院長に押川方義、初代副院長・初代理事局長にホーイ就任（8月）。東北学院開院式（11月）
1895年	明治28年	W.E.ホーイ	予科・本科を改組し、普通科5年、その上に専修部（文科・理科）2年とする。
1896年	明治29年		島崎春樹（藤村）、作文・英語教師として着任。
1898年	明治31年		理科専修部を廃止。
1900年	明治33年		第2代理事局長にD.B.シュネーダー就任（10月）
1901年	明治34年	D.B.シュネーダー	普通科長に笹尾粂太郎就任（4月）。普通科に制帽を制定。徽章TG章制定。第2代院長にD.B.シュネーダー就任。
1903年	明治36年	笹尾 粂太郎	東北学院同窓会設立(11月)。
1904年	明治37年		全校を普通科（5年）と専門学校令による専門科（3年）とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任（4月）
1905年	明治38年	田中 四郎	専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。東二番丁に普通科校舎完成。専門部に角帽を制定。徽章は全校TG章を用いる。普通科長に田中四郎就任（9月）
1906年	明治39年		普通科寄宿舎完成。
1908年	明治41年		「社団法人東北学院」を設置。創立記念日を5月15日に定める。
1910年	明治43年		校旗を制定。
1911年	明治44年		創立25周年記念式典挙行。

仙臺神學校

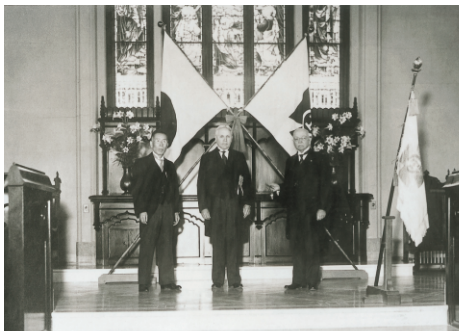
明治38年　普通科校舎

西暦	元号	歷代役職者	東北学院に関わる時事
1915年	大正４年		普通科を中学部と改称（5月・生徒数357名）。中学部長は田中四郎就任。
1916年	大正５年		「東北学院時報」創刊（１月）。南六軒丁（現大学土樋キャンパス）に専門部校地取得。
1918年	大正７年	五十嵐 正	専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。
1919年	大正８年		仙台大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼（３月）。仮校舎建築（９月）。
1920年	大正９年		中学部長に五十嵐正就任（１月）
1921年	大正10年		創立35周年記念式典挙行。中学部寄宿舎再建（９月）。
1922年	大正11年		中学部校舎再建（６月）〈東二番丁・通称赤レンガ校舎〉。
1923年	大正12年		東北学院教会設立（５月）
1925年	大正14年		神学科を専門部より分離し、神学部（第1科・第2科）とする。専門部は文科、師範科、商科となる。
1926年	大正15年		南六軒丁に専門部校舎完成（現土樋本館）、9月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行（10月）
1928年	昭和３年		専門部３科とも予科を廃止、４年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成（３月）
1929年	昭和４年		専門部を高等学部と改称。神学部第２科を廃止、第1科を神学部本科と改称し、３年の予科を置く。「財団法人東北学院」を設置（８月）
1930年	昭和５年		高等学部師範科に専攻科１年を置く。
1932年	昭和７年	出村 悌三郎	高等学部は３学期制を２学期制に改める。ラーハウザー記念礼拝堂完成（３月）。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。
1933年	昭和８年		高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。
1934年	昭和９年		神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。
1935年	昭和10年	E.H.ゾーグ	高等学部長代理に津久井善四郎就任（４月）
1936年	昭和11年		高等学部文科を文科第1部、師範科を文科第２部と改称。創立50周年記念式典を挙行。院長D.B.シュネーダーによる「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第３代院長に出村悌三郎就任（５月）。旧労働会建物および敷地を売却。第３代理事長にE.H.ゾーグ就任（６月）
1937年	昭和12年	田口 泰輔	神学部廃止、日本神学校と合同（３月）。高等学部は３年制となる。 高等学部長にE.H.ゾーグ就任（４月）
1938年	昭和13年		中学部長に田口泰輔就任（４月）

大正11年　東二番丁中学部校舎 赤レンガ

大正15年　南六軒丁・専門部校舎（現土樋本館）・左側
昭和7年　ラーハウザー記念礼拝堂・右側

西暦	元号	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1939年	昭和14年		中学部長に出村剛就任（４月）
1940年	昭和15年	小泉 要太郎	南町通り旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。第４代理事長に出村悌三郎就任（10月）
1941年	昭和16年	杉山 元治郎	高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任（４月）
1942年	昭和17年		高等学部商科第２部および中学部第２部を設置（ともに夜間）
1943年	昭和18年	出村　剛	高等学部商科を高等商業部、中学部を中学校と改称。中学校長に出村悌三郎院長が兼任（４月）
1944年	昭和19年		航空工業専門学校設置。航空工業専門学校長に宮城音五郎就任（４月）。第５代理事長に杉山元治郎就任（６月）
1945年	昭和20年		中学校長に出村剛就任（４月）。航空工業専門学校を工業専門学校と改称（12月）。中学校校舎空襲により焼失（７月）。仙台神学校舎空襲により焼失（７月）
1946年	昭和21年	月浦 利雄	高等商業部および同第２部を廃止（３月）。東北学院専門学校（英文科・経済科）および同第２部を設置。第４代院長に出村剛就任。中学校長に月浦利雄就任（４月）。専門学校長に出村剛就任（４月）
1947年	昭和22年		工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造２階建４教室増築完成。第６代理事長に鈴木義男就任（７月）
1948年	昭和23年	鈴木 義男	新制高等学校、同第２部を設置。月浦利雄同高等学校ならびに中学校長就任（４月）。専門学校長に小田忠夫就任（４月）
1949年	昭和24年		東北学院専門学校から新制大学に昇格。東北学院大学文経学部（４年制、英文学科・経済学科）を設置。小田忠夫初代学長に就任。東九番丁寄宿舎完成。
1950年	昭和25年	A.E.アンケニー	専門学校２部を東北学院短期大学部（２年制、英文科・経済科）と改称。第５代院長にA.E.アンケニー就任（３月）
1951年	昭和26年		「学校法人東北学院」を設置。専門学校を廃止。短大別科を設置。第６代院長に小田忠夫就任。中高理科教室鉄筋コンクリート3階建完成。
1952年	昭和27年	小田 忠夫	短期大学部に法科を設置。
1953年	昭和28年		総合運動場を多賀城市に開設。中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任（４月）。シュネーダー記念東北学院図書館完成（10月）。
1954年	昭和29年		多賀城第2寄宿舎完成。
1955年	昭和30年	五十嵐 正躬	創立70年記念式典挙行。中学校校舎鉄筋コンクリート3階9教室完成。『東北学院創立70年写真誌』を刊行（５月）。在米同窓生、創立70年記念として鐘を寄贈（12月）。蔵王にＴＧヒュッテ「栄光」完成。
1956年	昭和31年		中学・高等学校体育館完成（３月）。ウィリアム．Ｅ．ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立（４月）。大学音楽館完成（10月）



昭和11年 出村悌三郎院長就任式（左）
E.H.ゾーグ（中央）
D.B.シュネーダー（右）

西暦	元号	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1958年	昭和33年		中学・高等学校一本化、中学校長に月浦利雄高等学校長兼任（１月）。中学校赤レンガ校舎は都市計画により９教室を失う（４月）。中学・高等学校鉄筋コンクリート造４階建８教室完成（４月）。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成（９月）
1959年	昭和34年		短期大学部を東北学院大学文経学部2部（英文学科・経済学科）に改組。高等学校榴ケ岡校舎を開設。『東北学院70年史』を刊行（７月）。大学研究棟鉄筋コンクリート造4階建完成（９月）。自然科学研究室青根分室を開設（10月）
1960年	昭和35年		短期大学部を廃止（３月）
1961年	昭和36年		文経学部英文学科に専攻科を設置。
1962年	昭和37年		多賀城町（現多賀城市）に東北学院大学工学部（機械工学科、電気工学科、応用物理学科）を設置。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長に小田忠夫院長が就任（４月）。
1963年	昭和38年		押川記念館完成（２月）。工学部寄宿舎完成。野間記念剣道場完成（７月）。第７代理事長に杉山元治郎就任（９月）。
1964年	昭和39年	山根　篤	東北学院大学文経学部１部・２部を文学部１部・同２部および経済学部１部・同２部に改組。大学院文学研究科（修士課程）を設置。大学64年館完成（10月）。第８代理事長に山根篤就任（11月）。中学・高等学校地の一部を仙台市に市道として売却。
1965年	昭和40年		東北学院大学法学部（法律学科）および大学院経済学研究科（修士課程）を設置。赤レンガ校舎一部取壊し（１月）。宮城郡泉町市名坂字天神沢（現仙台市泉区天神沢）に10万坪の校地を取得（５月）。同窓会にＴＧ15日会発足（５月15日）。工学部4号館完成（10月）。中学校新校舎、中学・高等学校礼拝堂完成（11月）。大学土樋寄宿舎完成
1966年	昭和41年		大学院文学研究科（博士課程）、工学研究科（修士課程・応用物理学専攻）を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成（６月）。大学泉寄宿舎完成。青根セミナーハウス完成（12月）
1967年	昭和42年		工学部に土木工学科を増設。中学・高等学校運動部室完成（３月）。大学67年館完成（５月）。中学・高等学校向山寄宿舎完成。
1968年	昭和43年		大学院経済学研究科（博士課程）、工学研究科（博士課程・応用物理学専攻）を設置。工学部5号館・6号館完成（３月）。中学・高等学校弓道場完成（３月）。大学新研究棟68年館完成（８月）。『東北学院大学学報』発刊（10月）
1969年	昭和44年		工学部旭ケ丘寄宿舎完成。第９代理事長に月浦利雄就任（３月）
1970年	昭和45年		工学部校地に東北学院プール完成。
1971年	昭和46年	二関　敬	大学院工学研究科修士課程に機械工学専攻および電気工学専攻を増設。倉石ヒュッテ完成。中学・高等学校長に二関敬就任（9月）。榴ヶ岡校舎（高校）校長に五十嵐正躬就任（9月）。大学文団連棟焼失（9月）
1972年	昭和47年		東北学院榴ヶ岡高等学校として独立（４月）。高山セミナーハウス完成（7月）。泉市市名坂（現仙台市泉区天神沢）に榴ヶ岡高等学校校舎が完成移転（８月）。榴ケ岡高等学校体育館完成（12月）

西暦	元号	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1973年	昭和48年	渡辺 平八郎	東北学院同窓会館完成（４月）。米国アーサイナス大学に第１回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舎完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任（７月）
1974年	昭和49年		大学院工学研究科博士課程に機械工学専攻および電気工学専攻を増設。第10代理事長に小田忠夫就任（３月）
1975年	昭和50年		大学院法学研究科（修士課程）を設置。大学67年館増築完成（６月）
1976年	昭和51年		創立90周年記念式典挙行
1977年	昭和52年		中学・高等学校長に田口誠一就任（４月）。榴ヶ岡高等学校長に小田忠夫院長兼任（４月）
1978年	昭和53年	清水 浩三	大学90周年記念館完成（２月）。榴ヶ岡高等学校長に清水浩三就任（４月）。中学・高等学校赤レンガ校舎、宮城県沖地震のため一部倒壊（６月）。蔵王のTGヒュッテ焼失（８月）。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂（土樋キャンパス礼拝堂）に新パイプオルガンを設置（11月）
1979年	昭和54年		大学院法学研究科（博士課程）を設置。工学部計算センター完成（３月）。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式（３月）。大学78年館および部室棟完成（９月）。蔵王にTGヒュッテ再建（10月）。東北学院展開催（十字屋仙台店・10月）
1980年	昭和55年		中学・高等学校シュネーダー記念館完成（３月）。工学部機械工場および機械実験棟完成（３月）。榴ヶ岡高等学校礼拝堂及び北校舎完成（９月）。泉校地総合運動場および管理センター完成（９月）。中学・高等学校文化部室完成（９月）
1981年	昭和56年	情野 鉄雄	大学81年館完成（３月）。『東北学院報』発刊（４月）。情報処理センター設置。総合運動場プール完成（５月）。榴ヶ岡高等学校第１回海外研修（８月）。工学部体育館完成（10月）
1982年	昭和57年		米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。第７代院長・大学長に情野鉄雄就任（４月）。第11代理事長に児玉省三就任（４月）。図書館工学部分館完成（11月）
1983年	昭和58年	児玉 省三	高校第2部廃止（３月）。工学部礼拝堂完成（10月）
1984年	昭和59年		新シュネーダー記念図書館完成。中学・高等学校第１回海外研修（７月） 新シュネーダー記念図書館
1985年	昭和60年	宗方　司	大学整備計画案（教養学部泉校地移転など）公表（１月）。榴ヶ岡高等学校校舎増築完成（３月）。旧シュネーダー記念東北学院図書館を大学院校舎に改装（11月）。幼稚園新園舎完成（12月）
1986年	昭和61年	半澤 義巳	創立100周年記念式典挙行。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ヶ岡高等学校北校舎増築完成（３月）
1987年	昭和62年		中学・高等学校長に宗方司就任（４月）。榴ヶ岡高等学校長に半澤義巳就任（４月）。中学・高等学校体育館・武道館完成（12月）

西暦	元号	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1988年	昭和63年	橋本　清	大学泉キャンパス完成。大学教養部を移転。榴ヶ岡高等学校礼拝堂増築完成（３月）。幼稚園長に橋本清就任（４月） 泉キャンパス外観
1989年	平成元年	新妻 卓逸	泉キャンパスに教養学部（教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻）を開設。幼稚園長に新妻卓逸就任（４月）。『東北学院百年史』発刊（５月）
1990年	平成２年		大学院工学研究科土木工学専攻（修士課程）を設置
1991年	平成３年	武藤 俊男	工学部１号館完成（３月）。榴ヶ岡高等学校部室棟完成（３月）。中学・高等学校長に武藤俊男就任（４月）。中学・高等学校社会科教室完成（７月）
1992年	平成４年		大学院工学研究科土木工学専攻（博士課程）を設置。榴ヶ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成（１月）。第12代理事長に情野鉄雄就任（６月）
1993年	平成５年	田口 誠一	工学部2号館完成。中学・高等学校移転決定（３月）
1994年	平成６年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻（修士課程）を設置
1995年	平成７年		榴ヶ岡高等学校を男女共学制に移行。第8代院長に田口誠一就任。大学長に倉松功就任（４月）
1996年	平成８年	倉松　功	大学院人間情報学研究科人間情報学専攻（博士課程）を設置。榴ヶ岡高等学校家庭科実習棟完成（２月）。榴ヶ岡高等学校長に脇田睦生就任（４月）。榴ヶ岡高等学校第１回ホームカミングデー（11月）
1997年	平成９年		大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻、アジア文化史専攻（修士課程）を設置。ドイツのヴィースバーデン大学と学生交換に関する協定締結
1998年	平成10年	脇田 睦生	幼稚園長を田口誠一院長が兼任（４月）。韓国の平澤大学校（５月）、中国の南開大学（12月）と国際教育研究交流に関する協定締結。高山セミナーハウスを解体（８月）
1999年	平成11年		大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻、アジア文化史専攻（博士課程）を設置。大学設置50周年記念式典を挙行。第13代理事長に田口誠一就任（４月）
2000年	平成12年	長谷川 信夫	文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部２部英文学科と経済学部２部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任（４月）。土樋キャンパス8号館（押川記念ホール）・体育館完成（９月）。大学第１回ホームカミングデー（同窓祭・10月）。大学シンボルマークを決定。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得（3万１千坪）
2001年	平成13年		文学部基督教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻に改称。東北学院資料室開設（５月）。青根セミナーハウスの「自然科学教室青根分室」を川崎町に無償譲渡（５月）。大学体育会ヨット部新艇庫（閖上、８月）

規　程

東北学院資料室運営委員会規程

（設置および名称）

第１条　本院に、東北学院資料室（以下「資料室」という。）を置く。

（目的）

第２条　資料室は、本院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、本院の発展に資することを目的とする。

（事業）

第３条　資料室は、第２条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

一　資料の収集、整理、および保存に関すること。

二　資料に関係する刊行物の編集および出版に関すること。

三　資料の展示および公開に関すること。

四　資料の閲覧および貸出に関すること。

五　資料に関係する情報の提供に関すること。

六　その他、必要と認められる事業に関すること。

（運営委員会の設置）

第４条　資料室の事業を運営するため、東北学院資料室運営委員会（以下「運営委員会」という。）を設ける。

（運営委員会の構成）

第５条　運営委員会は、次の者をもって構成する。

一　学院長

二　総務担当副学長、宗教部長、総務部長、総務部次長、総務課長

三　中学・高等学校副校長１名、榴ヶ岡高等学校副校長、中学・高等学校事務長、榴ヶ岡高等学校事務長、幼稚園教頭

四　法人本部長、法人本部次長、法人本部室長、広報室長

２　運営委員会は学院長が招集しその議長となる。

３　運営委員会のもとに、必要に応じて実務委員会を設けることができる。実務委員は、運営委員会の議を経て委員長が任命する。

４　運営委員会の事務は、広報室が行う。

（資料室の管理・事務）

第６条　資料室の管理・事務は、広報がこれを行う。

（規程の改廃）

第７条　本規程の改廃は、運営委員会の議を経て理事会が行う。

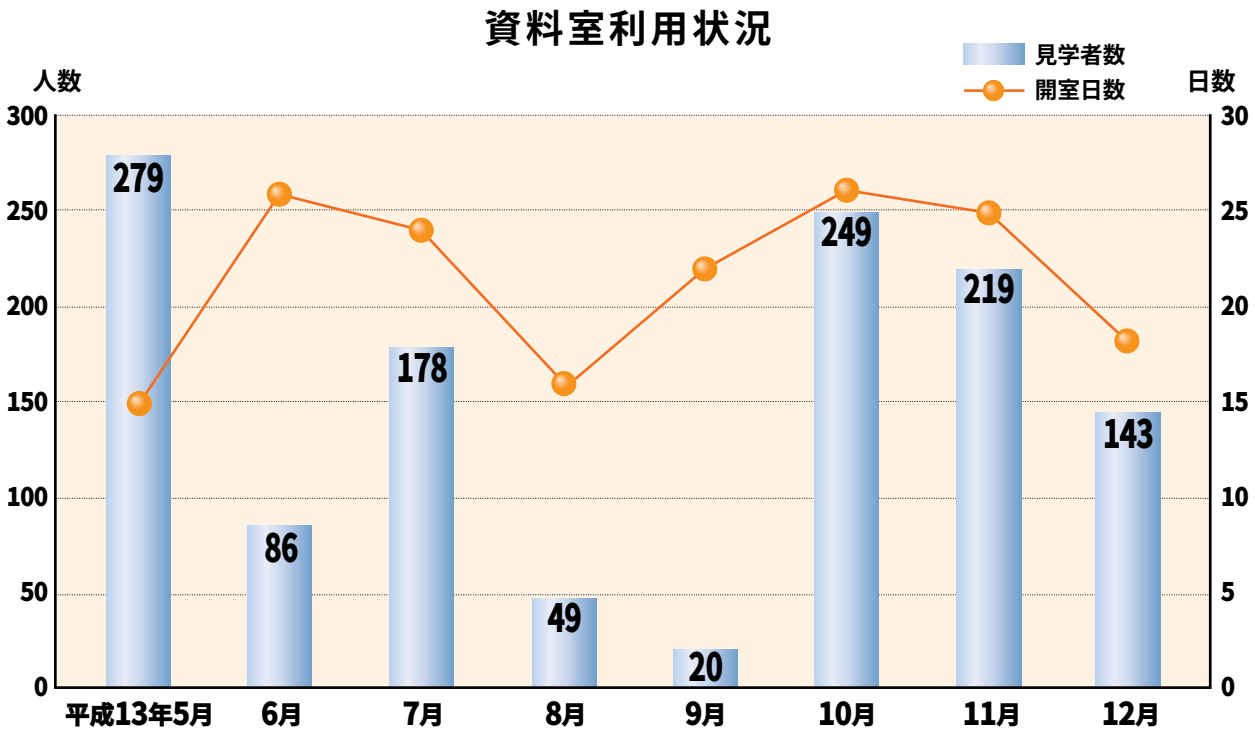
附則

本規程は平成13（2001）年4月1日より施行する。

資料室日誌

2001（平成13）年

2月22日　第1回東北学院資料館（仮称）設立準備委員会
2月26日　第1回東北学院資料館（仮称）開設準備小委員会
3月 5日　第2回東北学院資料館（仮称）設立準備委員会
3月14日　第2回東北学院資料室開設準備小委員会
3月16日　第3回東北学院資料室設立準備委員会
4月 9日　第4回東北学院資料室設立準備委員会
5月 7日　第5回東北学院資料室設立準備委員会
5月15日　東北学院資料室開設（三校祖特別展）
6月20日　第1回東北学院資料室運営委員会
9月19日　第2回東北学院資料室運営委員会
10月13日　東北学院大学ホームカミングデー特別展
11月 3日　文化財公開の日特別展
11月21日　第3回東北学院資料室運営委員会



利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

開室時間

授業期間中

月～金　10：30～16：00

但し、昼休み時間（12：30～13：30まで）を除きます。

土　10：30～12：00

（祝祭日はお休みいたします。）

長期休暇（春休み・夏休み・冬休み）中

月～金　10：00～15：30

但し、昼休み時間（12：30～13：30まで）を除きます。

（土・祝祭日はお休みいたします。）

東北学院資料室運営委員会

委員長	学院長	田口　誠一
委　員	副学長	関根　正行
	宗教部長	佐々木哲夫
	総務部長	飯土井公洋
	総務部次長	高橋　征士
	中学・高等学校副校長	出原　荘三
	中学・高等学校事務長	荒　孝夫
	榴ヶ岡高等学校副校長	杉本　勇
	榴ヶ岡高等学校事務長	高橋　正博
	幼稚園教頭	多田　征子
	法人本部長	佐治　勇
	法人本部次長	大童　敬郎
	広報室長	宮村　光一

広報室

広報室長補佐	吉田　知致
	早坂　友行
	渡辺　洋樹
	矢儀けい子

発行日　2001（平成13）年12月31日
編　集　東北学院資料室運営委員会
発　行　学校法人 東北学院
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL.022-264-6423　FAX.022-264-6478
【URL】http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/
印　刷　東北堂印刷株式会社